

# 新約聖書「テサロニケ人への第二の手紙」にみとめられる裏返し構造 —キアスムスと異郷訪問譚研究の交差点—

Reversal structures in the New Testament's Second Epistle to the Thessalonians  
—The intersection of chiasmus and otherworld visitation narrative studies—

大喜多 紀明

やぐら遺跡伝承文化研究会

Noriaki Ohgita

Folklore and Culture Study Group of Yagura

キーワード：新約聖書，テサロニケ人への第二の手紙，キアスムス，裏返し構造，非異郷訪問譚

Key words : New Testament, Second Epistle to the Thessalonians, Chiasmus, Reversal structure,  
Non-otherworld visitation narrative

## 抄録

本稿では、新約聖書「テサロニケ人への第二の手紙」の構造分析を通じ、非異郷訪問譚に裏返し構造がみとめられる蓋然性を検証するものである。まず本稿では、新たなキアスムスのモデルを提案した。このモデルは6組の対応要素からなり、要素間の逆順配列と対立・否定関係の両方が認められるため、裏返し構造の要件を満たすことが明らかとなった。本研究の結果、新約聖書27巻中16巻において裏返し構造が確認される知見が得られた。本稿の知見は、非異郷訪問譚に裏返し構造が出現する蓋然性の高さを支持するものである。

## 1. はじめに

聖書テキストにキアスムスがみとめられることについては、1820年代に Jebb<sup>[1]</sup>や Boys<sup>[2]</sup>らが指摘した。以後、Lund による一連の報告（例えば[3]）により、聖書テキストに多くのキアスムスがみいだされることが広く周知された。近年ではキアスムスによる構造分析や、かかる知見を援用した解釈論などが実施されるようになった<sup>[4][5]</sup>。旧約聖書においては、例えば Dorsey<sup>[6]</sup>が各巻をキアスムスの観点から体系的に論じた。また、Welch<sup>[7]</sup>は新約聖書に収録された各巻についてキアスムスの観点から論評した。

キアスムス分析に基づく分析は聖書研究において突出して進展し<sup>[8]</sup>、しばしば神学的解釈の道具として使用されてきた<sup>[5]</sup>のであるが、当該観点による分析は、なにも聖書に限定的に実施されてきた手法ではない。松村<sup>[8]</sup>は、聖書以外にキアスムスによる研究がみとめられる分野として、ギリシア、ラテン、メソポタミア、ウガリット、ゲルマン、イラン、アラブ、中国、日本などの文献があることを

書証とともに提示した。また、当該構造の呼称が、西洋古典学ではリング・コンポジション、ヒュステロン・プロテロン、インクルシオなどであり、フォークロア研究では折り返し構造やV字構造であることを述べ、こうした呼称の多様化が、「異なる分野において十分な情報の共有なしに行われてきた」ことによるものであり、諸学問分野の交流不足の結果、「もっと早期により豊かな展開が実現した可能性が残念ながら失われ」たことの可能性に言及した。さらに、松村は、かかる交流不足が、当該学術領域相互間での「学説史の空隙」をもたらしたことを指摘した。

本稿で注目する裏返し構造は、松村が「異なる分野」の一つとして取り上げたフォークロア研究（とりわけ異郷訪問譚研究）で使用される呼称である。つまり裏返し構造はキアスムス研究の一部を構成するものであり、キアスムスの構造上の下位概念であるのだが、そもそもの端緒において聖書における一連のキアスムス研究史とは無関係に「発見」された。以降、筆者の一連の先行研究<sup>[1]</sup>に

<sup>1</sup>4 節の表を参照。

より、双方の関連づけが試みられてきたものの、いまだ萌芽的な段階であるといえる。本稿を含む筆者の一連の研究は、松村が指摘した「学説史の空隙」を埋める試みでもある。

裏返し構造と異郷訪問譚との関連に関する研究は、異郷訪問譚にこの構造がみとめられることを指摘し、かつ、当該構造が異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」であること（本稿ではこれを「大林仮説」と呼ぶ）に言及した大林の報告<sup>[9]</sup>を端緒としている。大林仮説については、加藤<sup>[10]</sup>と依田<sup>[11]</sup>による韓国異郷訪問譚を題材とした研究や、アニメーション映画<sup>[12]</sup>、漫画<sup>[13]</sup>などを題材とした筆者の一連の報告により検証され、いずれにおいても大林仮説における蓋然性の高さを支持する知見が示された。

一方、大林仮説の射程とはいえない、非異郷訪問譚に裏返し構造がみとめられるかについては、アイヌ口承テキスト<sup>[14]</sup><sup>[15]</sup>および聖書テキスト（詳細は4節で示す）において、当該構造が使用された事例が提示された。しかしながら、これらの報告は、あくまでも事例の提示にすぎず、当該裏返し構造の発生機序を特定する段階までには至っていない。

以上をふまえて、本稿では、聖書テキストに限定的に注目することにし、当該聖書テキストにおいて、非異郷訪問譚に裏返し構造がみとめられることの蓋然性を評価することにする。なお、本稿では、新約聖書に収納された巻のなかで未調査のものの一つであるテサロニケ人への第二の手紙を題材とした検証をおこなうことにする。

## 2. 異郷訪問譚

異郷訪問譚とは、主人公が異郷を訪問する物語形式の呼称である。主人公が訪問する異郷も、地底、天上、海中など様々である。異郷訪問譚の特徴については、日本の上代における異郷訪問譚を分析した勝俣論文<sup>[16]</sup>や、特にジャンルの限定を設けずに特徴を示した西條論文<sup>[17]</sup>などが提示した。本稿で扱う対象は聖書テキストであり、日本の物語ではないため、本稿では、ジャンルを限定していない西條論文が示した特徴を参考にすることにする。

西條論文は、異郷訪問譚の特徴として、以下の4点の項目を列挙した。

- ① 異郷に入るときは、偶然に行く
- ② 異郷での体験は、異常体験である
- ③ 異郷から出るときは、自分の意志で出る
- ④ 異郷から出た後、主人公は変化する

ここで、上述の①～④をそれぞれ「特徴①」～「特徴④」と名付けることにする。本稿では、かかる特徴①から④をテキストに照合し、すべてに合致する場合、これを異郷訪問譚と呼ぶことにする。

## 3. キアスムスと裏返し構造

キアスムス研究は、主に聖書を題材とした領域で洗練されてきた。キアスムスの特徴については、例えば、McCoy は次のように述べた<sup>[18]</sup>。

In its most general sense, chiasmus involves inverted parallelism between two or more (synonymously or antithetically) corresponding words, phrases, or units of thought.

つまり、下記の図式のように、2組以上の要素が逆の順序で配列した（つまり、反転した並行関係にある）構造のことをいう。

$$A \rightarrow B \rightarrow \dots \rightarrow (X) \rightarrow \dots \rightarrow B' \rightarrow A'$$

ここでのX（ギリシャ語の「カイ」）は、キアスムスの構造上の中央に配置された対応がない要素である。Xは存在する場合としない場合があり、存在する場合を「集中構造」などのような別称で呼ぶことがある<sup>[19]</sup>が、本稿ではXの有無を区別せず、双方ともキアスムスと呼ぶことにする。ここで、Nを任意のアルファベットとしたときに、NとN'は何らかの対応関係にある。以下はキアスムスの実例である。Prusse<sup>[19]</sup>は新約聖書に収納されたマタイによる福音書7章18節「A good tree cannot bring forth evil fruit, neither can a corrupt tree bring forth good fruit」（引用文の下線と斜字はPrusseが記した）が下記のキアスムスからなることを示した。

- 1 good (tree)
- 2 bring forth
- 3 evil (fruit)
- 3 corrupt (tree)
- 2 bring forth
- 1 good (fruit)

なお、ここでは、例えば前半の要素 1 と後半の要素 1 が対応関係にある。

キアスムスの規模は、上述のような小さいものから、巻全体を覆う大きいものなど、様々である。本稿では、巻全体を覆う規模のキアスムスを「構造レベルキアスムス」と呼ぶことにする。例えば、Heil はユダの手紙における構造レベルキアスムスを次のように紹介した<sup>[20]</sup>。

A: 1:1-4: May the Mercy and Love of God Be Multiplied to You

B: 1:5-11: Some Are Kept under Gloom for Judgment

B': 1:12-20: Judgment of the Ungodly for the Gloom Has Been Kept

A': 1:21-25: Keep Yourselves in the Love of God Awaiting the Mercy of our Lord

ユダの手紙は 1 章 1 節から 25 節からなる短い内容であるが、要素 A と A'、要素 B と B' という 2 組の対応により構成されたキアスムスで構造化されており、かつ、このキアスムスは構造レベルキアスムスである。こうした構造レベルキアスムスについては、より長いテキストである、例えば旧約聖書のルツ記、新約聖書のヤコブの手紙、ピリピ人への手紙、ピレモンへの手紙にもみとめられることを Heath が指摘した<sup>[21]</sup>。

一方、裏返し構造は、神話や昔話、口承文芸などにおける異郷訪問譚研究で発案された用語である。大林論文はいくつかの日本の異郷訪問譚の構造分析をおこない、それらが裏返し構造からなることをみいだした<sup>[9]</sup>。以下は、大林が「イザナキの黄泉国訪問譚」にみいだした裏返し構造の図式である。

- 1 出産——汚れにより文化の神生る
- 2 神発生——肉体から殺害により発生
- 3 応待——友好的・内
- 4 食物を食べる——煮たもの、女神は現世に還れない
- 5 腐敗した女神を見る
- 6 食物を食べる——生のもの、男神は現世に還れる
- 7 応待——敵対的・外
- 8 神発生——外被から殺害によらず発生
- 9 出産——汚れの除去により自然の神生る

大林は、裏返し構造の特徴について以下のように述べた<sup>[9]</sup>。なお、引用文中のアルファベットと下線は筆者によるものである。

つまり、A 前半で問題となったいくつかのテーマが、後半においては前半とは逆の順序で次々に展開し、かつ B 同じテーマが問題になっていても、後半ではいわば前半の否定ないし対立というような形をとっている。たとえば、欠如というテーマが前半に出てくると、後半では欠如の除去という形になっている。

つまり、大林は裏返し構造の特徴を以下の 2 点にまとめた。

特徴 A：前半で問題となったいくつかのテーマが、後半においては前半とは逆の順序で次々に展開

特徴 B：同じテーマが問題になっていても、後半ではいわば前半の否定ないし対立というような形

なお、本稿では、かかる特徴 A と特徴 B の双方を備えた構造を「裏返し構造」と呼ぶことにする。こうした大林の定義をふまえれば、この「イザナキの黄泉国訪問譚」の図式の構造は、前半と後半での同一テーマの出現順序が逆転（特徴 A）しており、かつ、それぞれが対立的な関係（特徴 B）であることから裏返し構造であることがわかる。

キアスムスと裏返し構造の研究は異なる俎上に載せられてきた。あらためてキアスムスの特徴と裏返し構造の特徴を比較してみると、キアスムスの対応のすべてが「antithetically」<sup>[18]</sup>であることが裏返し構造の要件であるといえる。換言すれば、裏返し構造の特徴 A を備えているものがキアスムスであり、特徴 B も同時に具備するものが裏返し構造である。かつ、裏返し構造は、あくまでも物語全体にわたる構造を議論するものであり、物語の一部にみとめられる修辭的な特徴を対象としていない<sup>[9]</sup>ことから、裏返し構造の構成要件には構造レベルキアスムスであることが付帯条件として加えられる。さらにいえば、裏返し構造は、キアスムスの構造上の下位概念である。

#### 4. 非異郷訪問譚にみとめられる裏返し構造

聖書テキストに裏返し構造がみとめられるか否かの検証については、現在までは新約聖書の範囲のみで実施されてきた。検証がおこなわれた巻は下記の通りである。なお、かかる検証が実施された引証も併記する。

巻	引証
マタイによる福音書	[22]
ルカによる福音書	[23]
ローマ人への手紙	[24]
コリント人への第二の手紙	[25]
ガラテヤ人への手紙	[26]
エペソ人への手紙	[27]
テトスへの手紙	[28]
ピレモンへの手紙	[29]
ヘブル人への手紙	[28]
ヤコブの手紙	[30]
ペテロの第一の手紙	[31]
ヨハネの第一の手紙	[32]
ヨハネの第二の手紙	[33]
ヨハネの第三の手紙	[34]
ユダの手紙	[35]

新約聖書には合計 27 種類の巻が収納されており、現在まで上述の 15 巻が検証され、そのすべてにおいて裏返し構造がみとめられた。ここで、三つの福音書以外は、すべて非異郷訪問譚である。また、福音書については、イエスを人間とみなした場合には非異郷訪問譚であるといえるが、イエスを神とみなした場合には異郷訪問譚といえる<sup>[22]</sup>。以上は、新約聖書においては、非異郷訪問譚に裏返し構造がみとめられる蓋然性の高さを示す知見である。ただし、各巻はあくまでも独立したものであり、著者の属性においても様々である。つまり、たとえ新約聖書に同じく収納されているとしても、各巻は、個別的に評価を実施するべきである。筆者としては、こうした個別的な検証をふまえ、新約聖書全体の特徴についての論証をおこなうつもりであり、本稿は、その論証ための構成要素として位置づけられる。

<sup>2</sup>新改訳聖書のテサロニケ人への第一の手紙における「緒論」は、362 ページと 363 ページに挟まれた箇所にあるのだが、当該箇所にはページ番号の表記がない。

<sup>3</sup>テサロニケ人への第二の手紙の「緒論」も、新改訳聖書の 368 ページと 369 ページの間に配置されているがページが附番されていない。

#### 5. テキスト

新約聖書に収納された巻は、大きくは福音書（マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）、歴史書（使徒行伝）、書簡（パウロ書簡など）、預言書（ヨハネの黙示録）により構成されており、本テキストは書簡に分類される。

新改訳聖書<sup>[36]</sup>のテサロニケ人への第二の手紙の解説における「緒論」によれば、本テキストの著者はパウロである。また、このテサロニケ人への第一の手紙の執筆事情については、以下のように説明した<sup>2</sup>。

パウロはシラスとテモテをベレヤに残して、更にアテネに行き、そこで二人を待っていた（使一七 16）。やがて二人と出会ったが、テサロニケのことが気にかかり、テモテを派遣した（I テサ三 2）。その間にパウロはコリントへ行き、そこでテサロニケから戻って来たテモテと落ち合った（使一八 5）。テモテの報告の中には問題となる点があった。彼らはパウロの教えを誤解して、キリストは間もなく再臨するのだから働く必要はないと考え、働くことをやめていた（四 11、II テサ三 10-12）。また、すでに死んだ者はキリストの再臨にあずかれないと考え、悲しんでいる遺族もいた（I テサ四 13-18）。更に、異教的な生活に戻ってしまう者もいた（四 1-8）。パウロは、テモテから聞いたテサロニケの信者の信仰と愛を喜ぶと共に（三 6）、彼らを励まし、また上述の問題に対する指導と解決を与えるために、この手紙を書いたのである。

そのうえで、当該第二の手紙の執筆事情については次のように述べた<sup>3</sup>。

パウロがテサロニケの教会に第一の手紙を書いたから間もなく、新しい事情が生じた。パウロの主の日についての教えを誤解する者が出て来たのである（二 2）。彼らは主の日はすでに来たと考えた。そして、ある者はこの世の終わりは近いと考え、働くことをやめ、落ち着かない生活を送っていた（三 11）。こうした事態を知った

パウロは、この手紙を書き送って誤りを正し、怠惰な者に再度警告を与えようとしたのである。

つまり簡単にいえば、当該第一、第二の手紙は、テサロニケの信徒向けに書かれたパウロの手紙であり、宗教的な問題の指導と解決を目的としたものである。とりわけ第二の手紙については、信徒らの解釈の誤りを修正することを主たる目的としているといえる。

以下は、テキストの全文である。本稿では聖書の引用に関しては口語訳聖書<sup>4)</sup>を使用した。なお、引用文中には筆者によるアルファベットと記号が付されており、引用元にある章節の表記や改行のすべてが省略されている。

[A] パウロとシルワノとテモテから、わたしたちの父なる神と主イエス・キリストとにあるテサロニケ人たちの教会へ。父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。[A] [B] 兄弟たちよ。わたしたちは、いつもあなたがたのことを神に感謝せずにはおられない。またそうするのが当然である。それは、あなたがたの信仰が大いに成長し、あなたがたひとりびとりの愛が、お互いの中に増し加わっているからである。そのために、わたしたち自身は、あなたがたがいま受けているあらゆる迫害と患難とのただ中で示している忍耐と信仰とにつき、神の諸教会に対してあなたがたを誇としている。これは、あなたがたを、神の国にふさわしい者にしようとする神のさばきが正しいことを、証拠だてるものである。その神の国のために、あなたがたも苦しんでいるのである。すなわち、あなたがたを悩ます者には患難をもって報い、悩まされているあなたがたには、わたしたちと共に、休息をもって報いて下さるのが、神にとって正しいことだからである。それは、主イエスが炎の中で力ある天使たちを率いて天から現れる時に実現する。その時、主は神を認めない者たちや、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者たちに報復し、そして、彼らは主のみ顔とその力の栄光から退けられて、永遠の滅びに至る刑罰を受けるであろう。[B]

[C] その日に、イエスは下ってこられ、聖徒たちの中であがめられ、すべて信じる者たちの中で驚嘆されるであろう—わたしたちのこのあかしは、あなたがたによって信じられているのである。[C] [D] このためにまた、わたしたちは、わたしたちの神があなたがたを召しにかなう者となし、善に対するあらゆる願いと信仰の働きとを力強く満たして下さるようにと、あなたがたのために絶えず祈っている。それは、わたしたちの神と主イエス・キリストとの恵みによって、わたしたちの主イエスの御名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主にあつて栄光を受けるためである。[D] [E] さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの来臨と、わたしたちがみもとに集められることについて、あなたがたにお願いすることがある。霊により、あるいは言葉により、あるいはわたしたちから出たという手紙によって、主の日はすでにきたとふれまわる者があっても、すぐさま心を動かされたり、あわてたりしてはいけない。

[E] [F] だれがどんな事をして、それにだまされてはならない。まず背教のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する。わたしがまだあなたがたの所にいた時、これらの事をくり返して言ったのを思い出さないのか。そして、あなたがたが知っているとおりに、彼が自分に定められた時になってから現れるように、いま彼を阻止しているものがある。不法の秘密の力が、すでに働いているのである。ただそれは、いま阻止している者が取り除かれる時までのことである。[F] [G] その時になると、不法の者が現れる。この者を、主イエスは口の息をもって殺し、来臨の輝きによって滅ぼすであろう。不法の者が来るのは、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の惑わしとを、滅ぶべき者どもに対して行うためである。彼らが滅びるのは、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった報いである。そこで神は、彼ら

<sup>4)</sup>聖書の日本語訳版には、新共同訳、新改訳、口語訳などがあるが、本稿では口語訳聖書1954年版を使用した。その理由は、ひとえに著作権保護期間が満了しているところにある。本稿の引用は学術目的の引用であるため、引用行為自体になんらの問題はないのだが、範囲が巻全体にわたるため、念のために当該版を用いた。

が偽りを信じるように、迷わす力を送り、こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである。しかし、主に愛されている兄弟たちよ。わたしたちはいつもあなたがたのことを、神に感謝せずにはおられない。それは、神があなたがたを初めから選んで、御霊によるきよめと、真理に対する信仰とによって、救を得させようとし、そのために、わたしたちの福音によりあなたがたを召して、わたしたちの主イエス・キリストの栄光にあずからせて下さるからである。[G] [H] そこで、兄弟たちよ。堅く立って、わたしたちの言葉や手紙で教えられた言伝えを、しっかりと守り続けなさい。どうか、わたしたちの主イエス・キリストご自身と、わたしたちを愛し、恵みをもって永遠の慰めと確かな望みとを賜わるわたしたちの父なる神とが、あなたがたの心を励まし、あなたがたを強めて、すべての良いわざを行い、正しい言葉を語る者として下さるように。[H] [I] 最後に、兄弟たちよ。わたしたちのために祈ってほしい。どうか主の言葉が、あなたがたの所と同じように、ここでも早く広まり、また、あがめられるように。また、どうか、わたしたちが不都合な悪人から救われるように。事実、すべての人が信仰を持っているわけではない。しかし、主は真実なかたであるから、あなたがたを強め、悪しき者から守って下さるであろう。[I] [J] わたしたちが命じる事を、あなたがたは現に実行しており、また、実行するであろうと、わたしたちは、主にあって確信している。どうか、主があなたがたの心を導いて、神の愛とキリストの忍耐とを持たせて下さるように。[J] [K] 兄弟たちよ。主イエス・キリストの名によってあなたがたに命じる。怠惰な生活をして、わたしたちから受けた言伝えに従わないすべての兄弟たちから、遠ざかりなさい。わたしたちに、どうならうべきであるかは、あなたがた自身が知っているはずである。あなたがたの所にいた時には、わたしたちは怠惰な生活をしなかつたし、人からパンをもらって食べることもしなかつた。それどころか、あなたがたのだれにも負担をかけまいと、日夜、労苦し努力して働き続けた。それは、わたしたちにその権利がないからではなく、ただわたしたちにあなたがたが見習うように、身をもって模範を示したのである。また、あな

たがたの所にいた時に、「働こうとしない者は、食べることもしてはならない」と命じておいた。ところが、聞くところによると、あなたがたのうちのある者は怠惰な生活を送り、働かないで、ただいたずらに動きまわっているとのことである。こうした人々に対しては、静かに働いて自分で得たパンを食べるように、主イエス・キリストによって命じまた勧める。兄弟たちよ。あなたがたは、たゆまずに良い働きをなさい。もしこの手紙にしるしたわたしたちの言葉に聞き従わない人があれば、そのような人には注意をして、交際しないがよい。彼が自ら恥じるようになるためである。しかし、彼を敵のように思わないで、兄弟として訓戒しなさい。どうか、平和の主ご自身が、いついかなる場合にも、あなたがたに平和を与えて下さるように。主があなたがた一同と共におられるように。[K] [L] ここでパウロ自身が、手ずからあいさつを書く。これは、わたしのどの手紙にも書く印である。わたしは、このように書く。どうか、わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがた一同と共にあるように。[L]

## 6. テキストは異郷訪問譚であるか

本節では、テキストが異郷訪問譚といえるか否かについて、特徴①～特徴④と照合することにより検証する。

### 6.1. 特徴①との照合

特徴①は「異郷に入るときは、偶然に行く」であり、その大前提はストーリーに主人公が存在すること、かかる主人公が異郷に侵入することである。そもそもテキストはパウロによるテサロニケ信徒への手紙であり、その内容は「宗教的な問題の指導と解決」、あるいは「信徒らの解釈の誤りを修正すること」を目的としたものである。また、テキストは誰かを主人公としたストーリーとして構成されているわけではなく、かつ、主人公が何らかの異郷に侵入する記事はない。したがって、本テキストは特徴①に合致するとはいえない。

### 6.2. 特徴②との照合

特徴②は、「異郷での体験は、異常体験である」である。この特徴は、主人公が異郷に訪問することを前提としている。対し、テキストについては、

6.1 節で述べたように、主人公が異郷を訪問するという前提が欠落している。したがって、当然に、異郷での異常体験も欠落しているため、本テキストは特徴②に合致するとはいえない。

### 6.3. 特徴③との照合

特徴③は「異郷から出るときは、自分の意志で出る」である。この特徴は、主人公が異郷から出る際の様子に述べられているのであり、あくまでも主人公が異郷を訪問することを前提としている。この点については、上述のように、かかる前提が欠落しているため、テキストは特徴③については合致しない。

### 6.4. 特徴④との照合

特徴④は「異郷から出た後、主人公は変化する」である。つまり、この特徴は、異郷体験がもたらす主人公の変化についてであり、異郷への訪問が前提にある。一方、テキストには異郷への訪問が描かれていない。したがって、当然に、異郷体験がもたらす主人公の変化もない。よって、本テキストは特徴④に合致しない。

### 6.5. 小括

以上のように、本テキストは、特徴①～④のすべてに合致しないため、異郷訪問譚とはいえない。

## 7. 構造レベルキアスムスの先行研究

テキストに構造レベルキアスムスがみとめられるか、について、Welch は次のように述べた<sup>[7]</sup>。

1 and 2 Thessalonians Paul's earliest letters, the two to the church in Thessalonika, appear to manifest little internal structure despite an early attempt by Thomas Boys in his *Tactica Sacra* to cast each of these epistles into a loose A B–B–A arrangement. Although it can be said that these letters are composed of relatively discrete sections, no indications are forthcoming from these texts themselves to the effect that these sections were in any way intended to be read in parallel relationship with corresponding sections in other portions of the writing.

Welch が紹介した Boys のキアスムスは以下の通りである<sup>[2]</sup>。

- A. i . 1, 2. Epistolary.
- B. a. i . 3—10. Thanksgiving.
- b. i . 11, 12. Prayer.
- c. ii . 1—12. Admonition.
- B. a. ii . 13—15. Thanksgiving.
- b. ii . 16.—iii . 5. Prayer.
- c. iii . 6—15. Admonition.
- A. iii . 16—18. Epistolary.

つまり、Boys は 1 章 1 節～2 節 (A) と 3 章 16 節～28 節 (A), 1 章 3 節～2 章 12 節 (B) と 2 章 13 節～3 章 15 節 (B) がそれぞれ対応しているキアスムスであることを述べた。本稿ではこの構造を「Boys モデル」と呼ぶことにする。一方、Welch の言及にあるように、Boys は、かかる対応に関する詳細な説明はおこなっていない。

村井は次の構造を提案した<sup>[38]</sup>。

- 1 挨拶 (1:1-2)
- 2 キリスト来臨と裁き (1:3-12)
- 3 不法の者についての警告 (2:1-17)
- 4 わたしたちのために祈ってください・怠惰な生活を戒める (3:1-15)
- 5 結びの言葉 (3:16-18)

つまり、村井は、1 と 5、2 と 4 が対応関係にあるキアスムスであることを主張した。本稿ではこの構造を「村井モデル」と呼ぶことにする。ただし、村井モデルは論文形式ではなく資料形式であり、対応の詳細が説明されているわけではない。

つまり Boys モデルと村井モデルは、双方ともに詳細な説明がない。以上をふまえて、筆者は、当該テキストが構造レベルキアスムスによって構成されているかの検証を、新たなキアスムスのモデルを提案するとともに実施することにする。

## 8. テキストの構造レベルキアスムス

前節では、テキストにおける構造レベルキアスムスの先行研究として、Boys モデルと村井モデルが提示されてきたことを述べた。ここで、Boys モデルにおける A および A と村井モデルにおける 1 および 5 は、それぞれ同じ範囲である。一方、Boys モデルの B と B の対応は、村井モデルが提示した要素区分である 2, 3, 4 とは異なっている。こうした違いは、双方のモデルでの対応関係の構成に

おける判断の視点が異なっていることを意味する。

筆者は、5 節においてテキストの全文を表記した。その際、テキストにアルファベット、記号、丸数字を付した。ここで、N を任意のアルファベットとしたときに、[N/] と [N] で挟まれた範囲を「N」とする。つまり、テキストは、かかるアルファベットによって表示された範囲により構成されている。以下は、この区分に応じた図式である。また、各区分には筆者が付与したテーマおよび、参考として、各区分の章および節を表記した。なお、本稿ではこれを「大喜多モデル」と呼ぶことにする。

A 挨拶：1 章 1 節～2 節

B 信徒指導：1 章 3 節～9 節

C 信頼：1 章 10 節

D 祈り：1 章 11 節～12 節

E 手紙の受け止め：2 章 1 節～2 節

F 不法の者：2 章 3 節～2 章 7 節

G 不法の者：2 章 8 節～14 節

H 手紙の受け止め：2 章 15 節～17 節

I 祈り：3 章 1 節～3 節

J 信頼：3 章 4 節～5 節

K 信徒指導：3 章 6 節～16 節

L 挨拶：3 章 17 節～18 節

筆者は、A と L、B と K、C と J、D と I、E と H、F と G がそれぞれ対応していると仮定した。以下、かかる仮定を前提に、各対応がどのような関係であるかの検討をおこなうことにする。

以下、大喜多モデルと村井モデルおよび Boys モデルを対比してみる。大喜多モデルの A は村井モデルの 1 と同一である。大喜多モデルにおける B～D は、村井モデルの 2 の範囲である。大喜多モデルの E～H は、村井モデルの 3 の範囲に相当し、大喜多モデルの I～K は、村井モデルの 4 に 3 章 16 節を加えた範囲に該当する。さらに、大喜多モデルの L は、村井モデルの 5 から 3 章 16 節を除いた範囲である。つまり、大喜多モデルの要素区分は、3 章 16 節の位置づけこそ異なるのであるが、基本的には、村井モデルを構成する要素区分を主題的に細分化したものである。一方、大喜多モデルの B～K と Boys モデルの B と B の対応は大きく異なっており、これは、Boys モデルと村井モデルの違いと同様、大喜多モデルが Boys モデルとは

分析の視座が異なることを意味している。

3 章 16 節が全体に対し限定された範囲であり、かつ、当該範囲の所属の差異が全体の構造的理解に大きな影響を与えないという前提に立てば、大喜多モデルは、村井モデルの細分化モデルとして位置づけられる。いずれにせよ、こうした主題に基づく要素区分の細分化は、テキスト全体における修辭的秩序や文学的構造を検証するにおいて有意であるといえる。

### 8.1. A と L

まず、A と L についてである。テキストの下線 A と L は、テサロニケ信徒への挨拶が述べられている。なお、A には「パウロとシルワノとテモテから、わたしたちの父なる神と主イエス・キリストとにあるテサロニケ人たちの教会へ」と表記されており、この手紙の差出人がパウロ、シルワノ、テモテの連名であることが示されているが、L では、「パウロ自身が、手ずからあいさつを書く。これは、わたしのどの手紙にも書く印である」と記されているように、この手紙がパウロ自身の手によるものであることが強調されており、シルワノ、テモテが省略されている。つまり、手紙がパウロ単独の責任によるものであることを意味しているといえる。

要素	差出人
A	パウロ、シルワノ、テモテ：連名
L	パウロ：単名

ここでの差出人が連名であることと単名であることは、手紙内容が連帯的責任であることと単独責任であることの違いをも意味するといえるので、双方は対立的であるといえる。

### 8.2. B と K

B と K は、ともに信徒指導がテーマである。ここで、B では、例えば「わたしたち自身は、あなたがたがいま受けているあらゆる迫害と患難とのただ中で示している忍耐と信仰とにつき、神の諸教会に対してあなたがたを誇としている。これは、あなたがたを、神の国にふさわしい者にしようとする神のさばきが正しいことを、証拠だてるものである」と書かれているように、信徒らが迫害や患難などを受忍しつつ現在まで信仰を持ってきた

こと（これを「良い面」とする）へのパウロの評価と受容が述べられている。対し、K では、例えばパウロが「聞くところによると、あなたがたのうちのある者は怠惰な生活を送り、働かないで、ただいたずらに動きまわっているとのことである。こうした人々に対しては、静かに働いて自分で得たパンを食べるように、主イエス・キリストによって命じた勤める。兄弟たちよ。あなたがたは、たゆまずに良い働きをしなさい」と述べているように、信徒らが怠惰な生活をしていること（これを「悪い面」とする）へのパウロによる批判と指導が述べられている。つまり、B では、信徒の良い面（つまり信仰に基づく忍耐）をパウロが受容している（つまり誇りとしている）のに対し、K では、信徒の悪い面（つまり怠惰）を指摘し批判している（つまり命じ勧めている）。

要素	信徒の行為	パウロの対応
B	良い面	受容
K	悪い面	批判

ここでの、信徒の行為における良い面と悪い面、パウロの対応における受容と批判はそれぞれ対立的である。

### 8.3. C と J

C と J は信頼がテーマである。ここで、C では、「わたしたちのこのあかしは、あなたがたによって信じられているのである」とあるように、信徒たちによるパウロらへの信頼が記されている。それに対し、J では、「わたしたちが命じる事を、あなたがたは現に実行しており、また、実行するであろうと、わたしたちは、主にあつて確信している」とあるように、パウロらによる信徒たちへの信頼が記されている。つまり、双方は信頼がテーマでありながらも、C は主体が信徒たちであり客体がパウロらであるのに対し、J では、かかる主体と客体が逆転している。

要素	主体	客体
C	信徒たち	パウロら
J	パウロら	信徒たち

つまり、C と J の関係性は対立的である。

### 8.4. D と I

D と I は祈りがテーマである。ここで、D ではまず、「あなたがたのために絶えず祈っている」と述べ、パウロらが信徒たちのことを祈っていることが記されている。また、かかる祈りの効果については、「わたしたちの主イエスの御名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主にあつて栄光を受けるためである」とある。つまり、祈りが信徒たちに結実することが記されている。対し、I では、「兄弟たちよ。わたしたちのために祈ってほしい。どうか主の言葉が、あなたがたの所と同じように、ここでも早く広まり、また、あがめられるように。また、どうか、わたしたちが不都合な悪人から救われるように」と書かれているように、パウロらは信徒たちに祈りを要請しており、その効果がパウロらに結実すると述べた。

要素	主体	客体
D	パウロら	信徒たち
I	信徒たち	パウロら

つまり、D と I の双方は、祈りがテーマである点においては同一であるが、双方に記された祈りの行為における主体と客体は逆転しており対立的である。

### 8.5. E と H

E と H は手紙の受け止めがテーマである。ここで、E では、「霊により、あるいは言葉により、あるいはわたしたちから出たという手紙によって、主の日はすでにきたとふれまわる者があっても、すぐさま心を動かされたり、あわてたりしてはいけけない」とあるように、「わたしたち」の手紙にだまされてはいけけないことが述べられている。ところが、この「わたしたち」の手紙は実際にはパウロらによるものではない。一方、H では、「そこで、兄弟たちよ。堅く立って、わたしたちの言葉や手紙で教えられた言伝えを、しっかりと守り続けなさい」と述べ、パウロらの手紙を信じるべきことが記されている。つまり、E では、パウロらと偽る手紙を信じるべきではないこと、H では、パウロらの手紙を信じるべきであることが述べられており、双方の意味は同一であるが、表現方法は対立的である。

要素	手紙の差出人	受け止め
E	虚偽	信じるべきではない
H	真正	信じるべき

### 8.6. FとG

FとGは不法の者がテーマである。Fでは「不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない」とあるように、不法の者が出現することが述べられている。それに対し、Gでは「その時になると、不法の者が現れる」と述べたうえで、「この者を、主イエスは口の息をもって殺し、来臨の輝きによって滅ぼすであろう」などとあり、かかる不法の者が除去されることが記されている。つまり、GはFの否定である。

要素	不法の者
F	出現
G	除去

ここでの不法の者の出現と除去は対照的である。

### 8.7. 構造レベルキアスムスであるか

本節の冒頭で筆者が示した大喜多モデルが、はたして構造レベルキアスムスであるかの検証をここではおこなう。

上述のように、本節では要素対であるAとL、BとK、CとJ、DとI、EとH、FとGが対応関係にあるという仮定に基づき、当該モデルがキアスムスといえるか否かの検証を実施した。8.1～8.7節における検証によれば、各要素対が下記のようなテーマであることがみとめられた。

要素対	テーマ
AとL	挨拶
BとK	信徒指導
CとJ	信頼
DとI	祈り
EとH	手紙の受け止め
FとG	不法の者

つまり、大喜多モデルは、2組以上の要素に相当する合計6組の要素対が逆の順序で配列した構造であることからキアスムスである。なお、このキアスムスにはXがみとめられない。

さらに、このモデルは1章1節から3章17節を

範囲としており、これは本テキストの全領域であることから、当該キアスムスは構造レベルキアスムスでもある。

ここで、既知のBoysモデルおよび村井モデルと大喜多モデルの要素対における組数の比較を試みる。まず、Boysモデルは2組である。村井モデルは、構造上の中央に対応を持たない要素があるが、要素対についてみれば2組である。それに対し、大喜多モデルの場合は6組である。以上は、要素対の組数に注目した場合、大喜多モデルは、他の2種類のモデルに比して詳細であることを示している。

### 9. 大喜多モデルは裏返し構造であるか

前節の検証では、大喜多モデルが構造レベルキアスムスであることがわかった。本節では、当該モデルが裏返し構造でもあるかの検証をおこなうことにする。

裏返し構造であるためには、特徴Aと特徴Bの双方に合致しなければならない。ここで、当該モデルがキアスムスであることから、すでに特徴Aの要件を満たしていることになる。これをふまえ、本節では、当該モデルを特徴Bと照合することにする。

前節では、当該モデルを構成する各要素対の関係性がどのようなものであるかを検証した。かかる関係性は以下の通りである。

要素対	関係性
AとL	対立
BとK	対立
CとJ	対立
DとI	対立
EとH	対立
FとG	否定

以上より、当該モデルを構成するすべての要素対は対立あるいは否定の関係であることから、特徴Bの要件を満たすといえる。したがって、本モデルは特徴Aと特徴Bの双方を満たすことになるため裏返し構造でもある。よって、本テキストは裏返し構造からなるといえる。さらに、6節では、本テキストが非異郷訪問譚であることが示されたのであるから、本テキストは、非異郷訪問譚であり、かつ、裏返し構造でもある。

## 10. おわりに

本稿では、大林仮説の射程とはいえない、非異郷訪問譚を領域とし、聖書テキストに裏返し構造がみとめられることの蓋然性について検証した。なお、本稿では、従前の研究では調査されていないテサロニケ人への第二の手紙に注目し、裏返し構造の観点からの分析を実施した。その結果、当該テキストは、合計6組の要素対によって構成された裏返し構造からなることが確認できた。これにより、新約聖書の範囲においては27巻のうちの16巻が検証され、そのすべてにおいて裏返し構造がみとめられたことになる。福音書については異郷訪問譚といえるか否かの議論の余地が残るものの、本稿の知見は、当該蓋然性の高さを支持するものである。ただし、裏返し構造が発生する機序を解明するには至っていない。筆者としては、聖書の残りの巻についても引き続き検証し、かかる蓋然性と発生機序の検証をおこなうつもりである。

なお、本稿では、テサロニケ人への第二の手紙における構造レベルキアスムスの研究史で、Boysモデルと村井モデルを紹介したが、双方の構造が裏返し構造であるかの検証は実施しなかった。かかる検証は別稿で述べるつもりである。

## 引用文献

- [1]Jebb, J. "Sacred Literature". T. Cadell and W. Davies, 1820.
- [2]Boys, T. "Tactica Sacra: An Attempt to Develop, and to Exhibit to the Eye by Tabular Arrangements, a General Rule of Composition Prevailing in the Holy Scriptures. Vol. 1". Hamilton, 1824.
- [3]Lund, N. W. The presence of chiasmus in the New Testament. The Journal of Religion. 1930, 10(1), p. 74-93.
- [4]飯謙. 旧約詩文テキストの構造分析: 詩篇 56 篇をめぐる考察. 論集. 1987, 34(1), p. 15-36.
- [5]森彬. ルカ福音書の集中構造. キリスト新聞社, 2007.
- [6]Dorsey, D. A. "The literary structure of the Old Testament." Grand Rapids. Baker Academic, 1999.
- [7]Welch, J. W. "Chiasmus in the New Testament." Chiasmus in Antiquity: Structures, Analyses. Exegesis, 1981, p. 211-249.
- [8]松村一男. 三つの構造: キアスムス, プロップ, レヴィ=ストロース. 和光大学表現学部紀要. 2020, (20), p. 79-98.
- [9]大林太良. 異郷訪問譚の構造. 口承文芸研究. 1979, (2), p. 1-9.
- [10]加藤泰. 濟州島の二つの神話の構造分析. 民族学研究. 1979, 44(1), p. 83-90.
- [11]依田千百子. 韓国の異郷訪問譚の構造. 口承文芸研究. 1982, (5), p. 47-57.
- [12]大喜多紀明. 長編アニメーション映画『崖の上のポニョ』の構造分析: 2編の小さな異郷訪問譚の接合. 人間生活文化研究. 2017, (27), p. 1-13.
- [13]大喜多紀明. 小山ゆう『チェンジ』にみられる裏返し構造: 漫画作品における異郷訪問譚の事例. 人間生活文化研究. 2020, (30), p. 146-150.
- [14]大喜多紀明. アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造: 異郷訪問譚によらない事例. 北海道言語文化研究. 2016, (14), p. 45-72.
- [15]大喜多紀明. アイヌ口承テキスト「カニに手足が生えるわけ」にみられる裏返し構造: 中川裕が採録した白沢ナベの資料より. 西郊民俗. 2024, (266), p. 13-18.
- [16]勝俣隆. 異郷訪問譚・来訪譚の研究: 上代日本文学編. 和泉書院, 2009.
- [17]西條勉. 千と千尋の神話学. 新典社新書, 2009.
- [18]McCoy, B. Chiasmus: An Important Structural Device Commonly Found in Biblical Literature. Chafer Theological Seminary Journal, 2003, 9(2), p. 17-34.
- [19]Prusse, M. C. "Repetition, difference and chiasmus in John McGahern's narratives". Language and Literature, 2012, 21(4), p. 363-380.
- [20]Heil, J. P. 1 Peter, 2 Peter, and Jude: Worship Matters. Wipf and Stock Publishers, 2013, p. 301-302.
- [21]Heath, D. M. "Chiastic structures in Hebrews: A study of form and function in Biblical discourse", Doctoral dissertation, Stellenbosch: University of Stellenbosch, 2011.
- [22]大喜多紀明. 新約聖書「マタイによる福音書」における裏返し構造: James B. Jordan の図式に基づく検証. 人文×社会. 2022, (5), p. 193-212.
- [23]大喜多紀明. 「ルカによる福音書」全体における裏返し構造. 人間生活文化研究. 2018, (28), p. 75-81.
- [24]大喜多紀明. 新約聖書「ローマ人への手紙」における裏返し構造: Drake モデルにみとめられるキアスムスに基づく検証. 北海道言語文化研究.

- 2023, (21), p. 71-93.
- [26]大喜多紀明. 新約聖書「コリント人への第二の手紙」にみとめられる裏返し構造：村井による集中構造を前提とした検討. 人間生活文化研究. 2014, (34), p. 671-693.
- [26]大喜多紀明. 新約聖書「ガラテヤ人への手紙」における裏返し構造：Blighのキアスムス構造を前提として. 人間生活文化研究. 2023, (33), p. 561-574.
- [27]大喜多紀明. 新約聖書「エペソ人への手紙」における裏返し構造：村井のキアスムスを前提とした検証. 北海道言語文化研究. 2024, (22), p. 131-154.
- [28]大喜多紀明. 新約聖書テキストにおける異郷訪問譚と裏返し構造の関係：「テトスへの手紙」と「ヘブル人への手紙」の場合. 人文×社会. 2021, (4), p. 79-96.
- [29]大喜多紀明. 新約聖書に収納された「ピレモンへの手紙」にみられる裏返し構造. 人間生活文化研究. 2019, (29), p. 293-298.
- [30]大喜多紀明. 新約聖書「ヤコブの手紙」にみとめられる裏返し構造：「物語」とはいえないテキストの事例. 人間生活文化研究. 2019, (29), p. 15-21.
- [31]大喜多紀明. 新約聖書「ペテロの第一の手紙」における裏返し構造. 北海道言語文化研究. 2022, (20), p. 1-19.
- [32]大喜多紀明. 新約聖書「ヨハネの第一の手紙」における裏返し構造：Bergeが提示したキアスムス構造に基づく検証. 人文×社会. 2022, (7), p. 87-99.
- [33]大喜多紀明. 新約聖書に収納された「ヨハネの第二の手紙」の構造：裏返し構造をあてはめる観点からの分析. 人間生活文化研究. 2020, (30), p. 308-311.
- [34]大喜多紀明. 新約聖書「ヨハネの第三の手紙」にみられる裏返し構造. 人文×社会. 2021, (1), p. 451-459.
- [35]大喜多紀明. 新約聖書「ユダの手紙」にみとめられる裏返し構造. 人間生活文化研究. 2020, (30), p. 353-357.
- [36]いのちのことば社. 聖書 新改訳 注釈・索引・チェーン式引照付. いのちのことば社, 1981.
- [37]日本聖書協会. 聖書. 日本聖書協会, 1954, p. 324-326.
- [38]村井源. “テサロニケの信徒への手紙二の修辞構造：テキスト全体での集中構造（コンチェントリック）と交差配列（キアスムス）”. 聖書の修辞構造.  
[http://bible.literarystructure.info/bible/53\\_2Thessalonians\\_1.html#1-1](http://bible.literarystructure.info/bible/53_2Thessalonians_1.html#1-1), (参照 2024-11-01)

---

### Abstract

This study examines the plausibility of recognizing chiasmus-reversal structures (*uragaeshi-kouzou*) within non-otherworld visitation narratives by analyzing the structure of the Second Epistle to the Thessalonians in the New Testament. In this paper, a new chiasmus model is proposed. This model comprises six corresponding pairs of elements and demonstrates both reverse sequential alignment and oppositional/negative relationships between elements, thereby satisfying the criteria for a reversal structure. The findings reveal that such structures are present in 16 of the 27 books of the New Testament. The results of this study strongly support the high likelihood of reversal structures appearing in non-otherworld visitation narratives.

---

(受付日：2024年11月7日，受理日：2025年6月5日)

**大喜多 紀明（おおぎた のりあき）**

現在：やぐら遺跡伝承文化研究会代表

## プロフィール：

やぐら遺跡伝承文化研究会代表（2011年～現在まで）。

1965年神奈川県生まれ。東京工業大学大学院総合理工学研究科電子化学専攻修士課程修了。団体職員。専門は有機化学であったが、2004年以降の専門は文化人類学・民俗学。現在は特にキアスムス論を前提とした文学研究をおこなっている。

## 主な論文：

大喜多紀明. 知里幸恵の文章にみられる修辞技法：アイヌの民俗的修辞による影響. 北海道言語文化研究. 2013, (11), p. 99-112.

大喜多紀明. 新約聖書「コリント人への第二の手紙」にみとめられる裏返し構造：村井による集中構造を前提とした検討. 人間生活文化研究. 2024, (34), p. 671-693.